

南北問題上の車両整備技術

——発展途上国の現状の一例，ネパール王国——

高 橋 清

はじめに

すでに殆んどの方が御存知のことと思いますが、今の地球上には多くの国家がある中で、日本、ヨーロッパ諸国、アメリカを始めとする、いわゆる先進国はほんの一握りで、その他は急増する人口や、食料も満足に無いといった問題をかかえた、いわゆる発展途上国と呼ばれる国々です。そして、その人口割合は地球上の人口の約 $\frac{1}{3}$ を占め、いうならば地球上の人口の $\frac{2}{3}$ が飢えに苦しみながら毎日を送っているといった状態です。

これを地図上に表わしてやると、先進国は地図の北の方に分布して、発展途上国は南の赤道近くに分布している傾向があります。この分布の状態から、先進国すなわち富める国を北、貧しい発展途上国を南とし、その格差から生ずる問題を南北問題と呼ぶようになりました。新聞にも、この問題に関しての記事の無い日はなく、また世界の情勢から見ても、この南北問題は非常に重要なものですが、えてして、我々一般人からは遠い問題の様に思われて関心の薄いのが実情です。

しかし、特に資源の無い日本にとっては、これらの資源の供給先でもある発展途上国との関係を見捨てる事はできず、また国際社会上の日本の立場からしても、それら発展途上国のかかえる問題について、無関心では済まされません。

この様な現実のもとで、日本も先進国と呼ばれる様になった今、それら発展途上国に対して何らかの形で援助してゆくという事が日本の国際的立場、国際的な経済関係、さらに人道上の問題などといった理由で、世界情勢の中で日本に求められています。こう言った世界情勢の求めに、こたえるべく、日本もそれなりの発展途上国援助を行っています。それを行っている政府機関として、外務省の下に国際協力事業団（JICA）という組織があり、その事業の一環として、青年海外協力隊（Japan Overseas Cooperation Volunteers 略して J. O. C. V.）という部門があります。

この青年海外協力隊はアメリカのピースコー（平和部隊）と前後して作られたもので、10数年の歴史を持ち、そして、昭和55年4月現在、アジア、アフリカ、中南米地域など26ヶ国の発展途上国で約700人の20代から30代の青年たちが多種多様の職種に渡り、現地の人と一緒にその国づく

りの為に働いています。看護婦や、土木技術者、測量士など第一線の現場の人や、理数科教師、図書館司書などの他、農業、漁業、スポーツ指導などといった広範囲の、そしてあらゆるポジションについて活動している青年海外協力隊の隊員たちは、数ある世界の技術協力の集団の中で最も高い技術水準を持ち、しかも開発途上国の最前線に出て働いているという事で、国際的評価が世界で一番高い技術者の協力集団だと認められています。

私はこの青年海外協力隊の車両整備技術者として、昭和50年2月から昭和52年4月まで、ネパール王国 自治省 警察局警察本部で車両整備技術の教官の任に当たっていた訳ですが、そのネパール王国で教官をしていた体験をふまえて私なりに感じた開発途上国の一例としてその現状について、またその車両整備技術というものについて述べてみたいと思います。

ネパール王国について

ネパール王国はインドと中国にはさまれ、面積が北海道の約2倍、人口が一千万ちょっとと言われていますが、日本ではヒマラヤ山脈、そしてエベレストの国と言った方が一般には通りが良い様です。さらに、戦前、戦中派の人にはグルカ兵の国と付け加えておけばハハーンという事になると思います。

そのネパール王国ですが、一般に山ばかりのイメージがありますが、インド平原の北の方もネパール領土で、タライ地方と呼ばれている、その地方は気候も風土も人間も北インドと同じです。もっともインドとネパールの国境は水牛が水浴びしている小川がそうで、国境地帯を歩いていると、いつの間にかインドに入っている事がよくあります。又、中国チベットとの国境線も大体の感じで、羊などは他国の草を食っている訳です。そんな感じですから、幹線道路の国境以外は非常にラフな面があります。そしてその幹線道路は車の通れる道という、首都のカトマンズ盆地から中国チベットへ入るコダリ道路、ポカラを經由してバイラワへ続く道、南下してビルガンジへの道、その他ブトワールからダーズリンへ抜けるアジアハイウェイIIルートなど、数える程しかなく幹線道路以外へはタライ地方のジープでやっと入れる限られた場所を除くと、車は入って行きません。

そういった道路事情ですから、車の台数も少なく、主に輸送用のトラックがその大部分を占め、乗用車は首都カトマンズを始めとする都市部の金持層が持っているにすぎません。しかもガソリン1ℓが8Rs程で（日本円に換算すると約160円）ネパールの物価水準からすると、ベラボウな値段なので、金持ちといえども日本みたいに毎日タタドライブに乗り回すと言ったことはせず、（そもそも金持ちはあまり外に出ず、身の回りの事はサーバントにやらせて自分達は昼寝ばかりしています。またドライブと言っても道が悪いので、わざわざ行く気にならない）車はピカピカに磨いて車庫の中に入れてあり、どちらかと言うとステータスシンボリックな置物となっています。

輸送用のトラックは、これとは全く逆に徹底的に使用されてオンボロ車がガタガタ無理矢理に

しかも荷物を一杯積んで走っています。道が悪い上にオンボロ車だから当然よく故障しますが、故障したら所構わず直し始めます。人の家の門の前とか、時には交差点の中で、オイルを道にタラタラとタレ流しながら、2日から3日かかってゴソゴソとやっていますが、いつの間にか居なくなっている事を思うと、一応直して走って行ったのであろうかと思われま

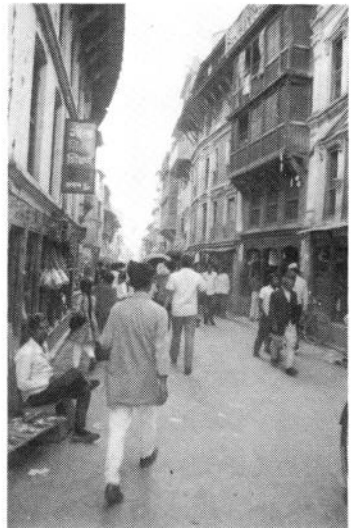
す。大体これで、頭の中にイメージができて来たと思いますが、車に関して言えばその様な状態の中で、警察本部の車両整備の教官として着任し、M. T. セクション（車両隊）で教えることになりました。

日本からカトマンズへ

日本を発ち、インドのニューデリーからネパールの首都カトマンズに着いたのは国王の戴冠式（コロネーション）を2週間後にひかえた昭和50年2月14日でした。

カトマンズの空港に高度を下げる飛行機の中で、やっと着いたという軽い安堵感、これから二年間生活できるだろうかという不安、そして初代の車両整備教官ということで、その責任の重大さと仕事に対する意欲。とにかく日本の政府の面子と日本の車両整備技術の評価が私のやり方ひとつに懸って来ている訳で、日本人の評価というもの、私でされると思うと、絶対に失敗は許されないという思いが、頭の中を駆け巡っていました。

着いて2日目、コロネーション準備のあわただしい中を縫う様にして日本大使館やネパールの各大臣、パンチャット（ネパールの国会）委員に表敬訪問を済ませると、さっそく自分の配属される警察本部へ行き、警察庁長官（Inspector General of Police 略して I. G. P.）に挨拶を済ませ車両隊（M. T. セクション）の様子を見に行ったところ、コロネーションの準備でゴッタ返して、こちらの詳しい打ち合わせはまた後日という事で終わりました。まあ先は長いし、コロネーションが終らないと何もできそうにない様子だったわけです。



カトマンズの繁華街
（さしずめ日本の新宿といったところ。）

最初のコトバのカベ

その後3週間ほど私は一人でネパール人の民家に泊り込みネパール語の現地訓練をさせられたのですが、他の日本人と別れて1人ポッチになり、そのネパール人の家の部屋でボケーとしてい

ると、早速はこりまみれの服を着たネパール人達がゴソゴソと私の様子を見に来ました。日本で受けたネパール語の訓練がどの程度のものか、ちょっと試しにネパール語のカタコトをしゃべってみると、それを聞いたネパール人達は、とたんにベチャクチャと話してくるのです。そればかりか、“オーイ、ジイサンもパーサンもちょっと来てごらん。このジャパニ（日本人）はカタコトのネパール語をしゃべっているよ。おもしろいから皆んなでカラかってみよう”と言ったかどうか知らないが、いっぺんに人がふえ、ワイワイガヤガヤ、そのうちイヌまでまぎれ込んで来て、部屋の中にジョンペンはされるわで、散々でしたが、もちろん私は何を言っているのかさっぱり分かりません。

そうしていると私はノドがかわいて来たので水をもらおうと“パニ、パニ（水）”と言ったのですが通じません。ネパール人達も何を言っているのか分からず、かわりばんこにたずねて来るのですが通じず、6～7人目になって私があきらめかけたころ、身ぶり手ぶりでやっとなんか“ああ、水か”と通じました。

同じ発音をしているはずなのに、ちょっとのことでなかなか通じないと思い知らされた一場面です。

ネパール田舎生活

時間もたち、ウルサかったネパール人達も帰って行ったので、改めて部屋の中を見回すと、壁はムキ出しのレンガ壁で、床は牛の糞を乾燥させたのを水でねって塗り、広さは八畳ぐらいで、ハダカ電球がポツンと1つに、とてもベッドといえる様な代物ではないベッドが置いてあり、それが唯一の家具で、あとは私の身の回りの物を入れたトランクが1つあるだけです。窓から見える外の風景は日本の田舎に似ていて、レンガ壁に草ぶきの屋根の家があり、庭にはニワトリと羊が遊んでいます。そして2月なのに畑にはソラマメの花が咲き、柵につながれた牛がのんびりと草を食べています。全くのどかな日本の田舎の風景そのままだと思いながら視線を隣の家の壁に移すと、そこには、何と、牛の糞を丸めてそれをペッタペッタと壁にはりつけているではありませんか。壁に糞をはりつけて乾燥させているのですが、ウチワぐらいの大きさの丸いオセンベイの様な形ではりついているそれは真中に手の跡がくっきりと残り、それが家の壁にズラーと並んでついているのは不潔で何か異様な感じを受けました。

気を取直して水を汲みに先程聞いた共同水場へ行くことにしました。

場所はすぐに分かったので、バケツを下げて行き、水場だから足場が悪くなるので、足元に注意しようとしてちょっと足先を見ると、その足元に何やらウドンが落ちています。アレ、ネパールにもウドンがあるのかなと思って今度は良く見てみると、ギャー、何とカイチュウの丸々と太ったやつではないですか。びっくりして回りを見回してみると、排水溝の所に人糞がうず高く3つ4つあり、それにも栄養の良さそうなカイチュウがいます。こりゃ大変な所だ、長居は無用という訳で

早く水を汲んで帰ろうとしたのですが断水して出て来ません。帰ろうとして、さっきの所をチラと見ると、ノラ犬とニワトリがそのカイチュウのいる人糞をつついていました。

ネパールではトイレのある家もありますが、田舎に行くとは外にしています。そしてゴミ等も日本の様に処理せずに道に捨てます。日本から着いて日の浅かった私にはその程度の事でも大変ショックでした。またこの様な事から分かる様に、公衆衛生とか病気について無知なものですから、寄生虫や病気等も非常に多い所で、一週間もしないうちに私は、発熱、下痢にやられてあえなくダウン。…でもそれは毎度の事だと帰国する頃には慣れてしまいました。

その発熱でダウンしている時、着のみ着のまままで寝ていると、何やらモゾモゾと痒くなりました。虫が居るみたいなので、服を脱いで見てみると、黒びかりのする大きなノミが居ました。つかまえて殺し、安心して寝ていると、又何やらモゾモゾとします。まだいるのかなと思って見たところ今度はなかなか見つかりません。おかしいなと思って、パンツのゴムのぬい目を見てみると、白アリの様な形をしたシラミがいました。話には聞いていたけれど、実物を見たことが無かったので、その不気味に動くシラミを見つけた時には、又々、ギャーとショックでした。しかも着ている物を全部調べて見ると、全部で4匹もいました。

そこから毎日ネパール語訓練の為、現地の小学校に通い、子供達と一緒に勉強したのですが、最初の日から子供達の人気の的になり、休み時間には回りを三重、四重にグルグルと囲まれます。私が右へ行けば子供達もゾロゾロと、左へ行けばまた左へゾロゾロ。運動場がホコリッほいので私はいつもホコリの真中に居ました。カタコトのネパール語をしゃべったと言っては笑い、通じないところは入れ替わり立ち替わりワイワイ言いながら教えてくれます。ネパール人の先生の中に年の頃20才すぎのすごい美人の先生がいて、…私も本当いうと、その先生に教えてもらいたかったけれど…その先生は話しかけるとはずかしくてすぐに逃げてしまうくせに、いつもまたすこし離れた所でニコニコしながらこっちを見ていました。まあネパール語はともかく、その美人の先生見たさに毎日小学校に通っていたようなもんです。

その様な日々を送り、コロネーションのレセプションに出席する為、カトマンズの協力隊(J. O. C. V.)オフィスに出て行った時は、それこそ、そこが別世界の様に思えました。床が牛糞ではなく、コンクリートで、壁もちゃんとセメントが塗られていて、ペンキまで塗ってあり、蛍光灯が灯り、水道の蛇口をひねればいつでも水が出てくる、しかも水洗のトイレでペーパーが付いている。それこそ今から思うとバカらしい話ですが、そうでない所でたった2週間程生活してくるだけで日本の様にどんな田舎に行っても、蛇口をひねれば水が出てくる、電気もいつもつくと言った事が当り前の世の中が、まるで別世界のようにすばらしい事で、日本の当り前の有難さが身に染みてわかった訳です。

久し振りにシャワーを浴びてさっぱりし、スーツを着て文明人?の身なりをしてレセプションに行くと、会場に日本の皇太子御夫妻が来ていてお目にかかることが出来ました。前に私は東京の東宮御所でお会いした事があったのですが、その事を御二人が覚えていて、色々と雑談していた

ら、“色々で大変ですね”と言われたから、私も皇太子御夫妻のスケジュールが忙しくて大変ですねといったら笑っておられました。生来ノンビリ屋の私はネパールに来たとたんそれに増々磨きがかかって、一週間もしないうちにネパール人と同じくらいのスローペースになってしまい、時間なんか関係ないという生活に陥っていたから、その時スケジュールに追われている御二人をみると、つい口に出てしまった訳です。

業 務 開 始

驚きと恐怖の毎日を過しているうちにコロネーションも終り、いよいよ仕事に入ることになりました。協力隊（以下 J. O. C. V. と略します）オフィスで人事面の打ち合わせをし、警察本部に行き、車両隊（M. T. セクション 以下 M. T. と略します）の教官に着任したのですが、先ず現場を見ながら話をしようという事で、M. T. の最高責任者の Mr. P. ライと一緒に見て回ったところコロネーションの後なので何から手をつけていいのか分からないぐらいゴッタ返しています。どうもこうもできないので、まずトレーニングに関して権限をどれ位くれるかという事から交渉に入りました。



ポリスヘッドクォーター旧本館

勿論こういう事はその場で決められないので、警察庁長官（以下 I. G. P. と略します）と M. T. の Mr. P. ライ、それに私達教官2人で話をしたところ、最終的に警察側の回答は、今まで車両整備のトレーニングの例が無い。従ってどうしていいか全く分からないのでトレーニングに関する全権限を教官に与えるから、思う様にしてくれとの一任の約束を取りつける所まで交渉して持つて行くことができました。それで先にこちら側教官2人の分担を決めて仕事に入る事にしました。私ともう1人の教官の山田君は、2人とも一応ガソリン、ジーゼルの両方を取り扱えますが、それまでの実務経験では私はガソリン、山田君はジーゼルの方を主に扱っていて慣れていましたから、その関係でトレーニングの分担を決めました。

さて一任されたと言っても一大プロジェクトの全権限と全責任を負わされる訳ですから失敗して、ゴメンでは済みません。失敗してはいかんという心理的プレッシャーがかかり失敗を恐れる為に行動にブレーキをかけようとする意識と、全権を持っているからそれを大いに活用し、バリバリやろうという意識の全く相反する2つの意識が頭の中に同居して踏ん切りがつかなくなりましたが、じっとしていても仕方がない、折角ここまで来たのだから、やれるだけやれば失敗しても仕方が無いと覚悟して居直ることにしたら、気が楽になりました。

それでは先ず手始めにトレーニング計画を立てないといけません。訓練生と、トレーニング場、それに時間の設定ですが、これは最初の I. G. P. とのミーティングで現地側の目標がとりあえず、M. T. の車を M. T. 内部で直せるようにとの事だったので、日本の三級整備士レベルになるようにトレーニングをしようという打ち合わせができていたから、それに沿うように、まず訓練生を15人選んでくれと Mr. P. ライに申し入れ、訓練期間を1年間にしました。

この2つは直に話がつきましたが、トレーニング場がありません。それで警察本部の構内をあちこち歩いて回っていたらワイヤレス（無線本部）の部屋が手頃な大きさで空いていたので、そこを貸してもらうことにして、黒板、イス等も都合してもらい、教室に使うことにしました。実習場の方は M. T. のガレージを使い、車を移動させて場所を空けたのですが、下が砂地なので、他の場所が見つかるまでの期間とりあえず使うという事にしました。工具とか教材ですが、工具の方は倉庫の奥の方の箱に手持工具が雑多に放り込んであったので、それを整理して使えるような物を持ち出して使い教材の方はガレージの奥にあるスクラップのランドローバーと、ウイリージープから部品を取外してすることにしました。

こういった準備に2ヶ月程かかりましたが、一応トレーニングを始められる状態にまで持って行く事ができたのと、I. G. P. から早く始めてくれとの要請があったので、トレーニングを開始することにしました。

最初となった訓練生達は M. T. セクションでも割合中堅幹部で階級で言うとサブ・インスペクターぐらいで、ネパール警察ではこれぐらいの階級だと地方の警察署の署長相当のクラスな訳ですから結構な連中のはずですが、車に関しては全く素人なので、車のイロハから教えて行くことになりました。午前は講義、午後は実習で、部品名称とか技術用語は英語を使い、講義とか説明はネパール語で行います。毎日家に帰ると次の日にする事を英語とネパール語に書き出して、辞書を引きながら訳して行きます。夕食もそこそこにその作業に取りかかると夜半にそれが終り、次の日の打ち合わせをして寝るといった毎日でしたが気が張りつめていたので、そう苦にはなりませんでした。



トレーニングの休み時間

家には温水が無いので、週に2回 J. O. C. V. オフィスに行きシャワーを浴びたあと日本からの手紙を見るのが唯一の楽しみで、ことに日本からの手紙が来ている日は協力隊のみんなは「ウワ、来てる」といってすごく喜んでいました。

その様なトレーニングと平行して実習場の整備を進めることにしました。M. T. セクションの警官の二階建宿舎の一階に昔の車庫があって、そこが使えるそうだったので、内部を片づけて電気

を付け、床にコンクリートを塗り直すと、少々狭いけれど、15人位の実習場にはまあまあ使える様になったので、前のガレージから引越して、そこを实習場に確保しました。でも本当は実習場を早く用意してくれと Mr. P. ライに申し入れたにもかかわらず、一向にその気配が見られないので、業をにやして、勝手にこちらの権限で一方的に実習場として取り上げたのですが、過程はともあれ結果的にはうまく行ったから、まあ良しとしましょう。



実習場の内部

この実習場のコンクリート塗りにしても、実習時間をつぶしてM. T. の他の警官も総出でコンクリート塗りを手伝わせ、照明も警官達で付けてしまいました。こんな場合日本だと工事業者に頼むのですが、現地では割合自分たちでやってしまいます。面白いことに、職人の警官がいて、レンガ積み専門の警官だとか、配線専門の警官がいたりします。また警察のパーティなどに行くと、その余興にコントをやったり劇をやったり歌をうたったりすることもあります。ちょっと小学校の学芸会みたいですが、とっても楽しく、我がM. T. にも歌うたいが1人いて、パーティなどではよく歌っています。そんな場合、前の方に行き、ワーと手をたたいてやれば、彼、にっこり笑って胸を張り、一段と声をはり上げて歌います。何しろ単純だから、とっても扱い易い。

そうしているとトレーニング時に、時々4~5人ずつまとまって抜ける様になりました。説明を聞くと勤務だと言うのですが、どうも良くわからないので、詳しい話を聞いてみると、国王が外出する時の護衛の白パイに乗る仕事だと言うので、Mr. P. ライにトレーニング中の警官を使わないでM. T. の他の警官を使ってくれと言ったけれど、その仕事(ローヤル・パイロット)にはある程度以上の者でないといけないという事で、又、I. G. P. に呼び出されて、その事について言われたので、トレーニングが遅れるけれど仕方が無いという事になって了解させられました。

この私の教えている警官たちのローヤル・パイロットという仕事は国王の護衛に当たるので、金モールのついた派手な格好で、白パイに乗り、赤い回転灯をくるくる回しながらけたたましくサイレンを鳴らして、軍隊が2時間も前から通行人を蹴散らして開けた道の真中をさっそうと走って行く、いわばネパールで一番カッコいい仕事で、子供達の憧れの的ですよ。丁度日本で子供達がジェットパイロットになったつもりで、両手を横にのばし、"キーン"といいながら走って行く、それと同



国王の護衛に当たる警官達

じ様に、ネパールの子供達は両手を前にのばし、バイクのハンドルを握っている様な格好をして、“ウー”とサイレンの真似をしながら、裸足で走って行きます。

まあ、その為の白バイを整備するのも仕事の内になっていますから、街でそういった国王の行列にぶつかった時には、裏を見ているだけに、時にはニヤニヤしながら時にはあいつの車大丈夫かなと心配しながら、その行列を見送っていました。

そんな状態のもとで毎日トレーニングをしていたのですが、今度は講義の時、朝教室へ行ってみると黒板が無くなっていたり、机やイスが足らなくなったりしている事がありました。でも大抵の場合、それに気付いた訓練警官の誰かが、どこからか持って来たのでその時は別に気に留めなかったのですが、そういった事がひんぱんに続くので不審に思い“どうしたんだ”と聞くと、“ワイヤレスのトレーニングがあって、その方に黒板や机を使っている。もう少しするとワイヤレスの講義時間が増えるのでこの教室も使えなくなる”との返事です。ワイヤレスの間借人である我々は教室を空け渡さなければならぬので、今度は警察の予備部隊の宿舍内にある卓球場を教室に借りて、今度はそっちに移動することにしました。こんな具合に一週間に一度は何か問題が起きて、その都度、交渉にあちこち回らされました。

初めの予定よりは少しずつ遅れて行ったものの、その頃はそれなりにトレーニングをすることが出来ていたのですが、計画の $\frac{2}{3}$ ぐらいを消化して、新しい年の正月気分がまだ残っている頃、I. G. P. から、M. T. の建物を建替えるのでトレーニングを一時中止してくれとの要請が出てきたので、それに従って一時中止する事になりました。

トレーニング中断以後

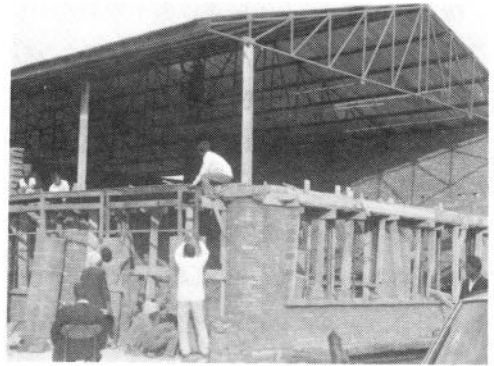
その建物を建替える計画というのが、まず先に車庫と私が以前から要求していたトレーニングのワークショップを一緒にした建物を先に建て、それから古い建物を取り壊し、以前からあった建設半ばで中止したガレージを完成させるという三段がまえの計画でした。

切のいい所でトレーニングを一時中止させ、それを待って直ぐに M. T. の警官と応援の他のセクションの警官達が工事に入りました。それでトレーニングの仕事が無くなった私は相棒の山田君と2人で新しいワークショップの設計をすることにしました。先ず場所は北側にするか南側にするかですが、これは日当たりがいいのと、I. G. P. にあんまり見られない所がよいというので、即、南側に決定。広さはガレージの $\frac{1}{2}$ よこせといたのですが、向こうがどうしてもやれんと言うので、コンプレッサーをガレージ側に置くという条件で $\frac{1}{4}$ の広さに切られてしまいました。

どうのこうのと言いながらも一応の機械類の配置場所も決めたのですが、この機械類というのが、10年前のインド製だとか、15年前のロシア製などといった機械で、古いガレージの奥の方に放り出されていた物をトレーニングの為に工具を整理して見つけたので“あれを捨てないのか”と言ったらヤブヘビで、“あれを直して使える様にしてくれ”と言われた正直言ってどうし

ようもない代物なのですが、その機械類を警官たちが工事をしている間に我々2人で何とか動くだけにでもしようと言って本当に動くだけにした物です。

話を聞くとその機械類は、10年とか15年もの間全然使わず投げ出していたそうで、我々が動くようにしたコンプレッサーも、12年前にロシアから持って来て以来一度も動かしたことがなかったそうで、分解して見るとリードバルブが錆で折れていましたが、そんな状態の物ばかりでした。これ



建設中の新ワークショップ

らについても、前に機械があると聞いていたのにさっぱり無いと不審に思った原因がそれでやっと分かった訳です。要するに動かなくっても数があえばいいという事で、ツルツルの使えないレンチでもレンチで、動かなくっても、格好が機械であれば立派な機械だとしてしまっただけに勘定するから、こっちの勘定と数が合わないようになります。

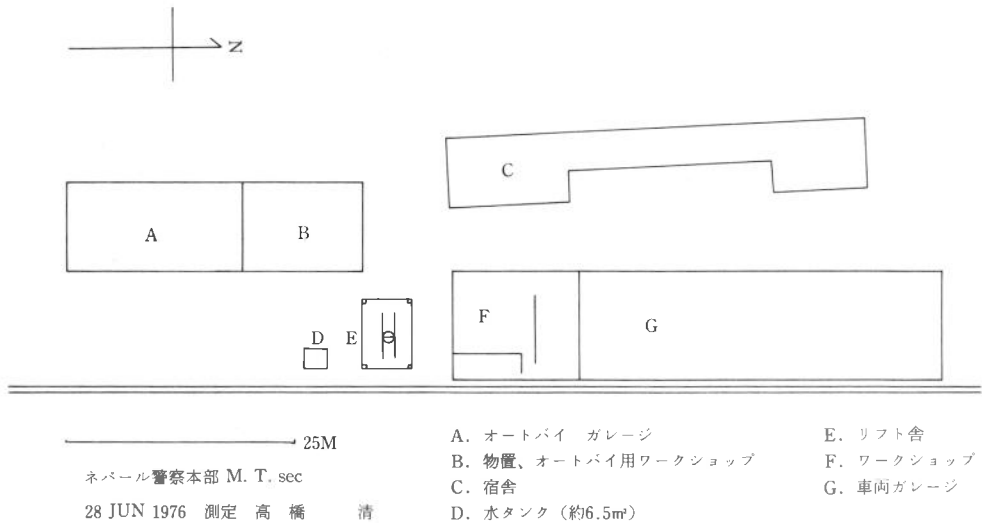
ガレージができて、ワークショップの形が整い終わったので内部の整理をし、トレーニングを再開しようと話をしたところ、今度は古い建物を取り壊すから、そっちの方をしなければならないので、もう少し待ってくれと言われました。実はガレージを造る為に、すでに予定オーバーの3ヶ月を過ぎているのでこうなればもう少し待っても同じだと思ったので待つことにしました。

警官達がそれをしている間、私は手があいているので、トレーニングの時にネパール語の適当なテキストをさがした所、テキストが何もないという事が分かっていたから、簡単なテキストで良いから作っておこうと思い、英語のマニュアルをネパール語に訳して、それを製本化して出すことにしました。作るのに時間がかかりましたが、とにかく本を完成させたら、実は、この本がネパール語で自動車整備について書かれた最初の本になりました。

そういった事をしている間にM. T.の方ではまた2ヶ月程かかって建物を取り壊し、その後さらに建設半ばのガレージを完成させるからという話が出て来ましたが、これは作業量が少ないから、トレーニングの方をさせてくれと言って、ガレージの建設を横目で見ながらトレーニングを再開したのですが、案の定、以前のトレーニングでした事を忘れていたので、かけ足でもう一度教え直し、さらに残りの部分をなんとか格好がつくようにして、一応第一期のトレーニングを終了しました。

トレーニングを始めて終るまでの期間が一年間の予定が、その様な色々な事があって予定通り進まず、一年半近くかかって、しかも途中で中止などしている為に目標通りのレベルに上げる事もできず、結果論から言えば第一期のトレーニングは成功したとは言えないので、その事を少々気にしている私たちに対して、現地側や日本側の人達は私達2人のしたワークショップの設計や整備、それに私の作った最初のネパール語のマニュアル等を意外に高く評価してくれ、"お蔭で警

察のワークショップは軍隊のワークショップを追い抜いてネパールで一番良くなった”とか、“ネパール語のマニュアルを作ってくれて非常に嬉しい” など色々言ってなぐさめてくれたので私もまずまずだったのだなと思直すことができました。トレーニングの方はその経験を生かして第二期に入りたかったのですが、任期が近づいて時間的にトレーニングが中途半端になるので二期目からは交替隊員に任せることにして、残りの任期を次のトレーニングの為に、教材の整備とかワークショップの整理のやり直しなどのトレーニング準備及び業務引継ぎの方に当てたので結局業務面では2年間私がネパールへ行ってした事という、何もなかった M. T. にネパール軍隊と同じ位のワークショップを作らした事と、ネパール語で書かれた最初の車両整備マニュアルを作ったこと、M. T. のトレーニングの最初の一期をした事などです。



終 り に

考えてみると、日本のような贅沢な国は他にはありません。解体屋にはネパールの修理を見て来た私の目からは新車に見える様な車が山積みされているし、宴会などで手つかずの料理が残飯として捨てられているのを見た時には、ネパールの山奥で、ボロをまとって小石をしゃぶっていた農家の子供達のちょっとさみしそうな笑顔を思い出します。

あの時、私は“何をうまそうに食っているんだ”と聞かなければ、何も知らずに済んだかも知れません。

色々な人と会って、色々な国の話をして、それを繰返して行くと、やっぱり何か自分もしなければという気になっていきます。

ネパールの南部タライ地方は雨期になると毎年水びたしになります。草ぶきの家が、まるで池の中に浮いているゴミの様になり、そうすると食料が無くなります。毎日々々おかずは一握りのカボチャの芽ばかりですが、カボチャの芽という悲しいので、ちょっとクジラの肉に似た味のそれを、クジラ、クジラと言って気分を慰めます。海の無い国ですから、魚貝類がお金を積んでも手に入りません。それらの好きだった私は行って3ヶ月ぐらいたした時、カニの夢を見ました。カニを食べようとして目のさめた時のくやしきは、今では笑い話ですが、その時は本当に悲しかった事を思い出します。

ネパールには色々な思い出がありますが、私にとってはお金さえあれば何でも買えるという甘い考えをぶっ壊してくれ、また日本の常識は通用しないという事を痛烈に教えてくれた国です。

帰国して3年後、またネパールへ今度は旅行者として行くことが出来ました。久々のM. T.は見違えるように立派になり、内では私から数えて3代目の教官がトレーニングの指導をしていました。トレーニングも、かつて私の教えたネパール人を講師にして、彼にトレーニングをまかせて、教官は時々チェックをするだけで良いそうです。ワークショップの内は私達のいた時の通りで、工具管理もきちんとされています。それを見た時、私のした事はムダにはならなかった、ちゃんとネパールに根をおろした、そして私の敷いたレールの上をちゃんと走ってくれた2代目、3代目の教官たちに対して本当に有難いと思いました。



ネパール国王陛下夫妻
(公式レセプションの席上で)

人は替わりましたがI. G. P.に会って昔の話をしていたら、I. G. P.に"あなた達初代の教官がしっかりしてくれてから、今はこんなにできる様になった。たいへんありがとう"と言われて、その時は本当にやって良かったと思いました。

私にとってネパールという国は二番目の祖国になっています。その国については、私が日本について書こうとしても書き尽せないのと同様に、ネパールについても書き尽せません。新聞上などにネパールという活字を見るたび、そこで目が止まります。そして遠く離れたネパールの事を思い出します。私にとっては過去の事のはずですが、今もその繋がりは切れず、何年たってもすんなりとして入って行ける国の様な気がします。